

アフロディテ・パンデモス

著者	中山 典夫
雑誌名	藝叢：筑波大学芸術学研究誌
巻	3
ページ	70-85
発行年	2000-01-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149289

アフロディテ・パンデモス

中山典夫

Πῶς δ' οὐ δύο τὰ θεά; ἡ μὲν γέ που πρῶτη καὶ
 ἀμύρω Οἰωνοῦ θυγάτηρ, ἡν δὴ καὶ Οἰωνίαν ἐπωνομάσθηεν.
 ἡ δὲ νεώτερη Δίος καὶ Διώνης, ἡν δὴ Πανδημον καλοῦμεν.

(大意) しかし、どうしてこの女神(アフロディテ)に二種な
 いといえようか。一方は年長でウラノスから母親なしで生まれ
 た。私たちはそれをウラニアという紳名で称んでいる。他方は
 若年でゼウスとディオネの間に生まれた。私たちはそれをパン
 デモスと称んでいる。

プラトンの『饗宴』は、悲劇詩人アガトンが競演に優勝し、その
 祝の宴に集まったアテナイの知識人が、愛(Ἔρως)についてそれ
 ぞれの自説を述べるといふ形式をとっている。初頭に引用したの
 は、列席者の一人パウサニアスの演説の一部である(180D-E)。彼
 は続けていう(1)。アフロディテ・パンデモスに従うエロスは「大
 衆的であり」(πανδημὸς ἔστι)」。このエロスの支配下で恋をするの

は人間の中でも下等な者たちである。彼らは少年と同じくらいに女
 性をも愛し、魂よりも肉体に恋し、出来る限り分別のない者を相手
 に選ぶ。その際彼らは、ただ肉欲の充足だけを求め、その恋の在り
 方が立派であるかどうかは問題にしない。それゆえ彼らは、善悪に
 おかまいなく手当たり次第に何でも仕出かす。それは、彼らを司る
 エロスが年若い、男性と女性に与って生まれた女神に属するからで
 ある。他方、アフロディテ・ウラニアに従うエロスは、この女神が
 女性に関わりなくただ男性だけによって生まれたのであるから、少
 年への愛のみを司る。しかもこの女神は年長であるから、放埒とも
 無縁である。それゆえこのエロスに支配される人間は、性格が強壯
 で理性を有する者を愛し、男性に近づいてゆく(181B-C)。

このように、パウサニアスは人間の愛の形を二極に分化し、それ
 ぞれを司る女神としてアフロディテ・ウラニアとアフロディテ・パ
 ンデモスを想定した。それは人間の根源的な愛の感情と深く関わる
 ものであったから、やがてこの二種のアフロディテは、精神的な愛

と肉体的な愛の象徴として、すなわち天上のアフロディテ（ヴィーナス）と地上のアフロディテ（ヴィーナス）ととして、後世の哲学や美術の中で大きな役割を演ずるものとなった(2)。

I

たしかにギリシアの詩人は、女神アフロディテの誕生に関して二種の異なる説話を伝えている。ヘシオドスの『神統記』(Theogonie)によると、アフロディテはウラノスから生まれている(3)。

ガイア(大地)はウラノス(天空)と結ばれて次々と子を産んだ。しかし子の強さを恐れたウラノスは、生まれてくる子たちを次々と光の届かぬ大地の奥底に隠した。それを恨んだガイアは復讐を企て子の一人であるクロノスに鋭い三日月形剣を持たせて待ち伏せさせた。夜が来て、天が大地に恋い焦がれ、彼女の上に隙間なく覆い被さったとき、隠れていたクロノスが右手に剣を持って現れ、父親ウラノスの陽具を切り取った。クロノスはそれを肩越しに後方遠くへと投げ棄てた。波打つ海に落ちた陽具は永い間漂い続けたが、やがてその不滅の肉から白い泡が湧き出した。そしてそこに、一人の乙女が生まれた。その乙女はまずキュテラ島の近くを漂い、そしてそこから、立ち騒ぐ波に囲まれたキュプロス島に流れ着いた。そこでいと畏き美しい女神は陸へと上ったが、彼女の足が踏む大地からは柔い草が萌え出した。神々は、そしてまた人間たちも、その乙女をアフロディテと称んだ。彼女が泡(σπέρμα)から生まれたからである。また、キュテラ島に近づいたからキュテレリアとも、キュプロスで生まれたからキュプロゲネスとも称ばれ、さらには「微笑を愛する女神」(Ἐρωςθεῖα)とも称ばれたが、それは「陽具を愛

する者」(ἠρώωνθεῖα)の意味でもあった。女神が陽具から生まれたからである(154~210)。

以上がヘシオドスの伝えるアフロディテ誕生の神話である(4)。このおぞましくも、また奇妙な輝きをもつ説話は、そこに青銅器時代の武器である三日月形剣(σπάρα)が使われていることから推測されるように、かなり古い時代に成立したものであったと考えられる。ヒッタイトの粘土板に刻まれた楔形文字のテキストが、語るフルリ人の父神クマルビの神話は、ウラノスとクロノスの争いの原型がオリエン트에在ったことを明らかにしている(5)。

アフロディテはオリエントから渡って来た女神であり、古代のギリシア人もそのことを知っていた。ヘロドトスは、シリアの町アスカロンの神殿がアフロディテの聖地としては最古のものであり、ここを起源としてキュプロス、さらにキュテラの神殿が創建されたことを述べている(6)。オリエントで女神は、インシュタル(アッシリア)、アスタルテ(フェニキア)、アスケラ(シリア)、ミユリッタ(バビロン)と呼ばれ、それは天の皇后に位し、単なる愛と美の女神ではなく、月の女神、豊饒の女神、水の女神、戦いの女神、さらには黄泉の国を司る女神であった(7)。ギリシア人が最初に信仰の対象として受け入れたのは、この天の皇后としてのアフロディテ、すなわちアフロディテ・ウラニア(ウラニアはウラノス「天空」の女性形)であった(8)。

他方、ホメロスはアフロディテをゼウスの娘と称んでいる(9)。ホメロスの叙事詩と同じ言葉を使い、同じ韻律を用いたホメロス風

アフロディテ讃歌第五歌に於いても、女神はゼウスの娘とされている(10)。母親として、ホメロスはディオネの名を挙げて(11)。

ディオネ (*Atalyn*) はゼウス (*Zeus*) の女性形で、ギリシア本土の古い神託の地ドドナでは、この女神がゼウスと共に崇拝されていた。

ホメロスには、オリエント伝来の女神アフロディテを多様な権能をもつ彼の地のおどろおどろした天后の地位から切り離し、ゼウスを家長とするオリュンポスの神々の系列に組み入れようとする意図があったと思われる。『イリアス』の第五書で、トロヤ戦争の修羅場に割って入り、傷を負ってオリュンポスに帰って来たアフロディテに向ってゼウスは、

娘よ、御身の分と定められているのは、

戦士の仕事ではない筈だ、

それより御身は、心ゆかしい婚姻ゆめいのわざにかかわったがいい、

かような仕事は、すばしいアレースやアテーネが

万事取り仕切るうから

(四二八～四三〇行 梶茂一訳)

と語りかける。ここには、ゼウスの娘としてのアフロディテが、限られた権能をもってギリシアの神々の明確な秩序の中に組み込まれてゆく過程を見ることができ(12)。

ホメロスの詩の世界では、アフロディテはゼウスとディオネの娘とされていた。しかし、このホメロスのアフロディテがアフロディテ・パンデモスと称ばれる理由は何もない。エウリピデスは、ゼウスの娘ウラニア(τῆν Διὸς ὑπάρχον)とよび呼びかけている(13)。では、プラトンの伝える若く魅惑的なアフロディテ・パンデ

モスとは、一体どんな女神であったのだろうか。

II

悲劇詩人アガトンの祝宴が催されたアテナイには、女神アフロディテ・パンデモスを祀る聖域があった。そのことは、アテナイに出土したいくつかの碑文、それにさまざまな古代の文献の中の記述から知ることができる。

十九世紀の八〇年代に、アトロポリス西側斜面に築かれていた中世の城壁の中からいくつかの古代碑文の断片が発見された。その中のひとつ、文字の形から紀元前四世紀のものと思倣される碑文断片には、すでにアフロディテをパンデモスと呼びかけた言葉を見ることができ(14)。また同じ所から出土した別の碑には、エウテイオスがアルコン在職時(紀元前二八四～三年)にポリスの儀典担当役人 (*archon*) に対してアフロディテ・パンデモスの祭儀の次第を指示した告知文が刻まれていた(15)。このかなり長文の碑銘から私たちは、アテナイのアフロディテ・パンデモスの祭儀に関するかなり正確な情報を得ることができ(16)。

祭儀の折には、まず「行列」(*parade*) が組織された。聖域は、「鳩」(*parapeira*) の血で浄められ、「祭壇」(*bulter* 複数) には香油が、「屋根」(*opoi*) には松脂が塗られた。「神像」(*eiōn* 複数) は水で洗われ、そのあとでまた新たに「紫」(*porpora*) で彩られた。そしてこのような祭儀次第は、「父祖伝来」(*katá ta patrara*) のものであると明記されていた。

紀元後二世紀に編集されたと推測される一種の百科辞典 Harpo-

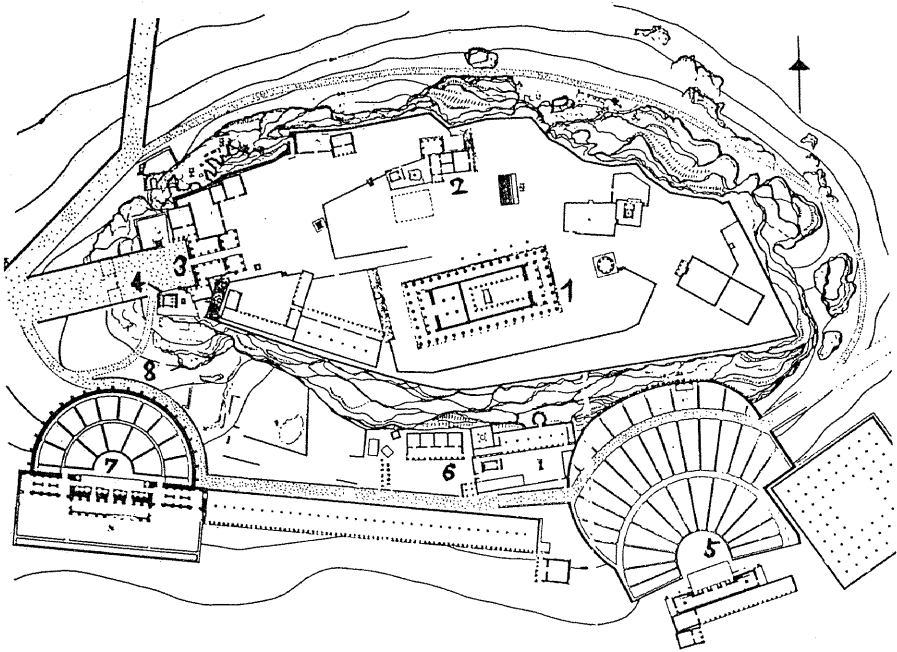


図1 アテナイのアクロポリス

- 1 パルテノン 2 アテナ・ポリアスの神殿(エレク
テイオン)
3 プロピュライア 4 アテナ・ニケの
神殿 5 デイオニュソス劇場 6 アスクレピオス
の神殿 7 ヘロデス・アッティコスのおデイオン
8 アフロディテ・パンデモスの神殿

Kration の *Παρθενος Ἀποδείκτης* の項は、紀元前二世紀のアテナイの文筆家アポドロソスの著書から引用されたものであった(16)。それによると、アフロディテ・パンデモスの聖域は「古いアゴラの近く」(*παρὰ τῆν ἀρχαίαν ἀγορὰν*) に在り、パンデモスという呼び名は、そこに、人々が「アゴライ」(*ἀγοραὶ*) と称んでいた「民会」(*ἐκκλησία*) のために「全住民」(*πάντα τὸν ὄμιλον*) が集まったからだという。現代の考古学は、アポドロソスのいう「古いアゴラ」が、古典期のそれよりもかなり南、アクロポリス西側の麓に在ったことを明らかにしている(17)。

紀元後二世紀の中頃にアテナイを訪れた地誌家パウサニアスは、アクロポリス南側斜面のテラスに建つアスクレピオスの神殿からプロピュライアに向う途中、女神テミスの神殿、ヒッポリュトスの墓に続いて、アフロディテ・パンデモスの聖域を見ている(18)。

以上のことから、アテナイのアフロディテ・パンデモスの聖域はアクロポリスの丘(図1参照)の西南の端に立つアテナ・ニケの神殿(図1の4)の真下、ローマ時代のオデイオン(図1の7)上方のテラスからほぼ垂直に切り立つ高さ約二〇メートルの崖の上に在

つたと推定されている(図1の8)(19)。この附近からは、アフロディテ・パンデモスの聖なる動物である鳩を浮彫したフリーズをもつヘレニズム初期の建築部分も発見されている(20)。また、この建築部分とその地点の岩盤にのこる建物跡を基にして、ヘレニズム時代のこの女神の神殿を復原することも試みられている(21)。

アポロドロスは女神の *ἡρώδιμος* という呼び名を、民会を構成する「全住民」(*πῶλιτα τοῦ δήμου*)と結びつけたが、地誌家パウサニアもまた、「アフロディテ・パンデモスの信仰は、テセウスがアテナイ人を多くつかの集落から *(ἀπὸ τοῦ δήμου)* 集めてひとつのポリスを創設したときに始めたものであり、そのとき同時にペイトー (*Πεῖθα*) の信仰も始められた」と述べている(22)。トゥキュディデスによると、神話時代のアテナイの王テセウスは、持つて生まれた知恵と力でもってアッティカ全土に政治的秩序を確立し、各地に分散していた小集落を統合して都市国家アテナイを建設したという(23)。

先に引用したアフロディテ・パンデモスの祭儀次第を定めた碑文では、香油を塗られる「祭壇」は *Boiax* と複数であり、水で洗われる「神像」も *εἰδῶν* と複数であった(24)。またパウサニアも、彼がアフロディテ・パンデモスの聖域で見た礼拝像を *εὐχάριστα* と複数で述べている(22)。このことは、アテナイの聖域ではアフロディテ・パンデモスと並んでペイトーもまた礼拝の対象となっていたことを物語っている。*Πεῖθα* (*Peitho*) は「説き伏せる」の意は、——説話の多くが伝えるような——単なる恋の「口説き」の女神ではなく、政治的行動には欠くことのできない「説得」の女神でもあ

った(25)。このように、アフロディテ・パンデモスは、——少なくともアテナイでは——住民の政治的統一の象徴として信仰されていたのであり、その祭儀は、国家の役人 (*ἀρχαῖοι*) によって取り仕切られていたのであった。

アテナイ以外では、アフロディテ・パンデモスはポイオティア地方のテーバイ(26)、アルカディア地方のメガロポリス(27)、ペロポネソス半島西北部のエリス(28)、小アジアのカリア地方のエリュトライ(29)とミュラサ(30)、コス島のコス(31)、エジプトのナウクラティス(32)などで信仰されていたことが知られている。しかし、その信仰が実際どのようなものであったかは判らない(33)。

III

礼拝の対象とされた神像自体については、多くを知ることができない。アテナイのアフロディテ・パンデモスの神殿に安置されていた礼拝像について地誌家パウサニアは、「古い神像 (*παλαιὰ εὐχάριστα*) は、私の時代にはすでに失われていた。今ある像は、まったく名の無い美術家の作ではない」と報告しているに過ぎない(34)。紀元前二八四〜三年の祭儀次第を定めた碑文が言及する礼拝像は、おそらくパウサニアがいう *παλαιὰ εὐχάριστα* のことであつたらう。それは、祭儀の折「洗われ」(*λοβαίω*)、その後で「紫」(*κόκκινα*) を塗られている(35)。*λοβαίω* という言葉は「水に浸して洗う」ことを意味するのであらうから、この礼拝像は、祭りのときには台座からはずされ、おそらく行列に担がれて、水の在る場所に運ばれたのであらう。とするとそれは、木または石でつくられた、



図 2

地誌家パウサニアスは、テトバイで三種のアフロディテ、すなわちアフロディテ・ウラニア、アフロディテ・パンデモス、アフロディテ・アポストロフィアの像について報告している(38)。それらは非常に古いもので、地元の伝承によると、テトバイの神話上の建国者カドモスが乗ってきた船の舳を材料としてつくられ、カドモスの

持ち運びに容易な簡素な形をした単独像であったと考えられる。アクロポリスからは、この丘に聖域をもっていた神々に奉納されたテラコッタ製の小像が数多く出土している(36)。その中にひとつのアフロディテ像がある(図2)。それは、下半身で繊細な髪をつくるキトンを着ており、その上に幅の広い外衣を羽織っている。長い髪を編んで垂らした頭の上には、ポロスと呼ばれる冠を載せており、前に出した両手には果物を持っている。足元には鳩が、左右にそれぞれ一羽づつ、寄り添うようにとまっている。このテラコッタの小像は、アクロポリスの一隅を占めていたアフロディテ・パンデモスの神殿の礼拝像を手本としてつくられたものであったかも知れない(37)。



図 3

妻ハルモニアが寄進したものであったという。このようなパウサニアスの叙述から、それらのアフロディテ像は、クソアノン(Chosaron)と呼ばれる古い伝統を継承した素朴な木彫像であったと考えられる。しかし、それぞれの女神像が、イコノグラフィの上でどのような特徴をもっていたかは判らない。またパウサニアスは、メガロポリスで、彼の時代にはすでに崩れ落ちていたアフロディテの神殿の廃墟に、ウラニアとパンデモス、それに今は名も伝わらないもうひとつのアフロディテ像を見ている(39)。この三番目の像はおそらくアフロディテ・アポストロフィアであり、メガロポリスのアフロディテ信仰は、テトバイから移されたものであったと考えられる(40)。これらの神像については、他に何も伝えられていない。

エリスには、フィディアス作のアフロディテ・ウラニアの黄金象牙像と共に、スコパス作のアフロディテ・パンデモスのブロンズ像が在ったとパウサニアスは伝えている(41)。ウラニアは片足で亀を踏み、パンデモスは牡山羊(τράβος)に乗っていたという。ローマの帝政時代にエリス地方で発行された貨幣の上には、両後足を地につけ、両前足をあげて跳ねる山羊に横すわりに乗る女性が浮彫されており(図3)、この浮彫はおそらく、スコパス作のブロンズ像を写したものであったろうと考え

られている(42)。すなわち、エリスのアフロディテ・パンデモスは「牡山羊に乗る女神」(Euterpeia)として表されていた。しかし、このスコパス作のブロンズ像が、アテナイで独立した信仰の対象とされていたクアフロディテ・エピトラギアク(‘Apopothen Euterpeia’)とどのような関係にあったかは判らない(43)。

Ⅴ

エリスのアフロディテ・パンデモスは、牡山羊(τράκτος)に乗っていた。彫刻家スコパスがこの像をいつ制作したか、その確実な年代を知ることにはできない。彼は、紀元前四世紀の中頃小アジアのハリカルナソスでマウソロスの為に仕事をしており、それから推して、エリスでの制作は早くても同じ世紀の六〇年代であったと考えられる(44)。ギリシア美術の上にはそれより早く、牝山羊(αἴξ)に乗るアフロディテ・パンデモスが表されていた。

クラシック時代後期およびヘレニズム時代の小美術、すなわち陶器画、奉納浮彫、鏡装飾、装身具などに、山羊に乗る女性の図像が繰り返し用いられている(45)。これらの図像は、スコパス作のブロンズ像の連想から、早くからアフロディテ・パンデモスと結びつけられて論じられてきた(46)。もちろんその際山羊は、牡山羊(τράκτος)と見做されていた。これらの図像に新しい解釈を加えたのはフルトヴェングレルであった(47)。彼は、山羊を牝山羊(αἴξ)(48)とし、それに乗る女性を光の女神としてのアフロディテ・パンデモスとしたのであった(49)。

今日に伝えられているこの種の遺品の中でおそらく最も早い例と見られるものに、ギリシア本土の比較的広い範囲に分布していた一

連のテラコッタ製の浮彫群像がある(50)。テーバイ近くの古代の墓地から出土した作品もその一例で、制作年代は紀元前四〇〇年頃と推定されている(図4)(51)。彩色を施されていたこのテラコッタの浮彫は、右上方に向けて跳ねる牡山羊とその背に乗る女性を表している。女性は上半身を露わにし、下半身を覆った外衣を右手で高く持ちあげ、左手を山羊の首に廻している。頭の上に載る放射状冠は、この女性が光の女神であることを物語り、彼女の大きな外衣は、空の青色で塗られていた。跳ねる牡山羊は大地を踏まず、その下方の空間には、同じく右上方に向かってとび跳ねる二匹の子山羊が表されている。小山羊たちの周囲には、赤褐色で多くの星が描かれ



図 4

ており、それらは、この場面が夜の天空であることを示している。牝山羊は、アフロディテ・パンデモスの聖獣であった(52)。フルトヴェングレルは、その牝山羊を星(αἶψα、ラテン語では capella)と結びつけたのである。全天空で六番目に明るいこの星(御者座のアルファ一星)は、北半球では初冬から、二匹の子山羊から成る小山羊座(Mount)と共に天頂に向けて昇り始め、冬になると荒れるエーゲ海の船乗りたちに、嵐の到来を告げる星として恐れられていた(53)。光の女神アフロディテ・パンデモスは、それらの星を率き連れて、今、夜空を天の頂へと昇っているのである。

近年アテナイのケラメイコスに出土した銀製の円盤には、フルトヴェングレルの説を裏付け、更に補う図像が、打出技法で浮彫されていた(図5)(54)。直径八・三センチの円盤の中央には、左上方に向って疾駆する牝山羊(αἶψα=capella)に横すわりに乗るアフロディテ・パンデモスが大きく表されている。女神はキトンを身に着け、その上から、外衣が下半身と左肩を覆っている。左手はその外衣を掲げ持ち、右手は牝山羊の首にまわされている。下方では、二匹の小山羊(Mount)が牝山羊と同じ方向に駆けている。周囲には七個の星が煌き、牝山羊の頭の上には三日月もあって、この場面が夜の天空であることを示している。左側で円盤の外周を繋いで立つ梯子は、牝山羊と小山羊たちの駆ける目的、すなわち天頂への上昇を暗示している。右側にはアフロディテ・パンデモスの聖鳥である鳩が描かれ、中央の女性像のアイデンティファイをいっそう確かなものにしていく。

ここには、更に二人の人物像が登場している。右上方では有翼の



図 5

少年が空に舞い、彼は差し出した右手に持つオリーブの冠を女神の頭に載せようとしている。図の左側の端では、香炉あるいは炬火を両手で持ち、鏝の広い帽子(ベタソス)を被り、外套(ヒュラミス)を羽織った若者が、外を向いて浮んでいる。この銀の円盤を発掘したウルズラ・クニツケは、他の多くの資料をあげて、女神にオリーブの冠、すなわち栄光の象徴を与える有翼の少年を「宵の明星」(ἐμπροσ)、「ベタソスを被りヒュラミスを纏う、すなわち旅の装いをした若者を「明けの明星」(Sodophonos)であることを明らかにし

た(55)。そして、この種の図像に登場するアフロディテ・パンデモスは、単なる光の女神ではなく、宵の明星および明けの明星、すなわち惑星の金星(Aphrodite = Venus)の女神であることを明らかにした。この円盤の図では、その惑星(金星)の女神アフロディテ・パンデモスは、分身ともいへべき宵の明星に祝福され、牝山羊星(Ais = capella)に乗り、小山羊座(Epovoc)を率き、今、夜の空へと旅とうとしているのである。

発掘者は、この銀の円盤の制作年代を紀元前三七〇年頃としている(56)。

V

ブラトンの『饗宴』の中で演説者パウサニアスは、アフロディテ・ウラニアとアフロディテ・パンデモスを道徳的・倫理的意味で区別した。すなわち、ゼウスとディオネの娘である若いアフロディテ・パンデモスは、束の間に消えてゆく肉体的な愛を司るエロスを支配し、他方、ウラノスの娘としてただ男性的のみから生まれた年長のアフロディテ・ウラニアは、精神的愛、少年愛を司るエロスを支配するといふ。このような考え方が演説者パウサニアス、あるいは著者ブラトンの独創でなかったことは、彼らの同時代人であるクセノフォンの著書の中にも、似たような叙述があることから明らかである。

クセノフォンは、彼の『饗宴』の中で、ソクラテスに次のように語らせている。「ところで、アフロディテがただ一種の神なのか、あるいはウラニアとパンデモスという異なる二種の神なのか、私にはわからない。唯一とみなされるゼウスさえも多くの綽名をもって

いるからね。ところがアフロディテの場合には、二種の神のためにそれぞれ独立した祭壇や神殿があり、祭祀もまた別様で、パンデモスの祭りほどどちらかといえば軽薄(Katopros)で、ウラニアのそれは品がある(Stylos)ということも私は知っている。だから、愛の異なるタイプが異なる源から生まれる、すなわち、パンデモスからは肉体的な愛、ウラニアからは精神的な愛、友情とか高貴な交際とかが生まれるということも考えられることだね。」(57)

ところで、ブラトンの『饗宴』の中でパウサニアスの演説は、どのような状況に於いてなされたのであろうか。この『饗宴』は、悲劇詩人アガトンが催した宴に集まったアテナイの知識人が、愛(Epos)についてそれぞれの自説を述べるといふものであった。著者ブラトンは、——最後に酩酊して闖入してくるアルキビアデスを除いて——ファイドロス、パウサニアス、エリュクシマコス、アリストファネス、アガトン、それにソクラテスといった、それぞれ立場を異にする六人の人物の演説を取り挙げ、それらを一対づつの三組とし、彼の得意とする弁証法に基づいて巧みに配列している(58)。まず全体への導入として、向学の気には燃えるがまだ物事の深みを知らぬ若者ファイドロスと職業的訓練を積んだソフィストであるパウサニアスが、一般的知識人を代表して、現実社会に於ける愛の実際とその効用を述べる。次に、医師のエリュクシマコスが、自然科学者としてマクロコスモスに於ける愛の作用を、人情の機微を知る喜劇詩人アリストファネスがミクロコスモス、すなわち人間から見た愛の姿を説く。続いてアガトンが、悲劇詩人らしく壮麗な言葉を駆使して愛の本質について語り、ソクラテスの演説への糸口

をつける。それを受けてソクラテスが最後に、マンテニアの巫女ダイオティマから聞いたとする、イデアに到達する愛の奥義を展開する。

すなわち、パウサニアスが述べたアフロディテ・ウラニアとアフロディテ・パンデモスの倫理的な対比は、ソクラテスの口を借りて語られるプラトンの哲学の本質とはまったく関わりのない、ただそれへの遙かな導入として、世事に通じた老練なソフィストが展開した一般論だったのである。このことは同時に、そのような考え方が世間で通用していたことを意味する。すなわち、当時のアテナイの民衆の間でアフロディテ・パンデモスは、肉体的な愛の女神と見做され、信仰されていたのであった。クセノフォンの叙述は(59)、そのような民間信仰に於けるアフロディテ・パンデモスの祭りが、軽薄(*debauchery*)なものであったと語っていたのである。

もちろん、肉体的な愛、異性間の愛は、一般の人々にとっては重要な関心事であった。

私たちは、のこされている美術作品から、アフロディテ・パンデモスが惑星(金星)の宵の明星)の女神として表されていたことを知った。陽が沈むと間もなく、西の空に燦然と輝き出すこの星は、古代ギリシアに於いても、恋する者たちにとって嬉しい味方であったにちがいない。閨秀詩人サッポーは、この星が瞬きはじめるのを期して花婿の許に送られる花嫁のための祝い歌をつくり(60)、ヘレニズム時代の恋の歌では、この星への讃歌が詠い込まれるのが普通であった(61)。

ギリシア人は——少なくとも知識人を自負する人たちは——、天体を信仰と結びつけることに抵抗を感じていた。アリストファネスは、太陽神ヘリオスや月の女神セレネを異邦人の神とし(62)、トゥキュディデスは、月蝕を恐れれた將軍ニキアスを冷笑している(63)。実際、ホメロスは、ブレヤデス(昴星)、ハイアデス(雨降星)、オリオン、小熊などの星座名を知っていたが、それらに何らの宗教的意味も与えていない(64)。天体の異変についても冷静に対処しており、たとえば、紀元前六四八年の日蝕を経験した叙情詩人アルキロコス(65)は、真昼の明るさが急に暗闇に変ったとき、女神ゼウスに対する畏怖よりも、むしろ神がそのような奇怪な出来事を放置していることに驚いている(65)。また、紀元前四三〇年の日蝕の際には、その時まさに船出しようとしていたペリクレスは、恐れ戦く舵取の目の前に自分の外套を揚げて「こう暗くなったのはただ外套よりも大きいもののためだ」と云ったという(66)。アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスなどの悲劇、アリストファネスの喜劇、ヘロドトス、トゥキュディデスの歴史にも、オリエンの占星術の影響をうかがわせるものは何もない(67)。

しかし、一般の民衆にあってはどうであったろうか。曆を持たない農民、羅針盤を持たない船乗りたちは、天体の動きにただ季節の移ろいや進むべき方向を測っただけであつたらうか。むしろ、彼らがそこに人智を超えた神の意志を読み取るうとしたと考えた方が、自然ではないだろうか。事実、夏の早朝、東の空に姿を見せるシリウスは灼熱をもたらす星として早くから恐れられていた(68)。また、すでにみたように、エーゲ海が荒れはじめる初冬に東の空から昇りはじめる牝山羊星(*Aix = capella*)や小山羊座(*Ergoz*)

は、嵐の到来を告げる星として船乗りたちに恐れられていた(69)。ペリクレスの舵取は日触に戦いたし、紀元前四一三年のニキアスに率いられたシチリア遠征軍は、指揮官だけでなく兵士の大半が月触に災いの前兆を見て帰国を遅らせたため、大敗を喫した(70)。

このような民衆の間で、日暮とともに輝き出て夜の訪れを告げ、恋する者たちに欲びをもたらす宵の明星(金星)は、愛の女神と結びつけられたのであろう。惑星(金星)の女神としてのアフロディテ・パンデモスの信仰が、何時頃はじめたかは判らない。ニカンドロスが伝える「ソロンが最初のアフロディテ・パンデモスの神殿を娼婦たちの収益金で建てた」という逸話は、アテナイではすでに紀元前七世紀にこの種の信仰があったことを語っているのかも知れない(71)。いずれにしてもそれは、素朴な民間信仰として民衆の間に根強く広まり、紀元前五世紀の終り頃には、一定のイコノグラフィによる造形表現(図4および5参照)を生む「神学」をもつまでに成長していた。この「神学」の確立には、紀元前五世紀の半ば頃から盛んに活躍をはじめたソフィストたちが大いに貢献したと思われる。古い神の概念を変えつつあった彼らが、オリュンポスの神神だけでなく、俗耳に受け易い民間信仰の神々をも、彼らの職業的論理の組み立てに利用したであろうことは、大いに考えられるからである。そして、その成果のひとつが、プラトンの『饗宴』に於けるパウサニアスの演説であったといえよう(72)。その際は、ウラニアとパンデモスの性格を——如何にもソフィストの思考法にふさわしく——詩人たちが伝えるアフロディテ誕生についての二種の異なる説話と結びつけたのであった(73)。

以上見てきたように、古代ギリシアに於ける女神アフロディテ・パンデモスは、ふたつの顔をもっていた。ひとつは、「全民衆」(παντα τον δειον)の統一の象徴であり、ポリスがその祭儀を執り行う、「政治的」(political)な信仰の対象としての女神であった。他のひとつは、ウラニアとの対比に於いて、精神的な愛に対する肉体的な愛を支配し、惑星(金星)と結びつけられた、「大衆的」(massive)な信仰の対象としての女神であった。必然的に、アフロディテ・パンデモスの造形表現にもふたつの面があった。両者は、イコノグラフィだけでなく、質をも異にしていたはずである。すなわち、公の祭儀の対象とされる礼拝像は、ポリスの英智を結晶させた Masterpiece であり、他方、民間信仰の奉納像や護符は、素朴な信仰心を表した Trivialart であった(74)。

アテナイ出身の彫刻家ブラクシテレスは、紀元前四世紀の半ば頃クニドスのアフロディテの神殿の礼拝像として全裸の女神像を制作した(図6)(75)。プラトンの『饗宴』が著されたのは、ブラクシテレスの青年時代であった。彼は、パウサニアスが『饗宴』の席で語り、民間信仰が祭祀の対象とするアフロディテ・パンデモスが、アテナイの精神世界で如何なる位置を占めるものであるかを正確に知っていた。彼のアフロディテ像は、この女神を肉体的な愛の象徴としてのみ見ようとする思想とは無縁であった。ブラクシテレスは、プラトンが『饗宴』に於いて、ソクラテスの口を借りて説いた美の理念を実際の作品で具現化したのであった。この彫刻家は、誰にもまして感覚的に美しい形を造形することができた。しかし彼

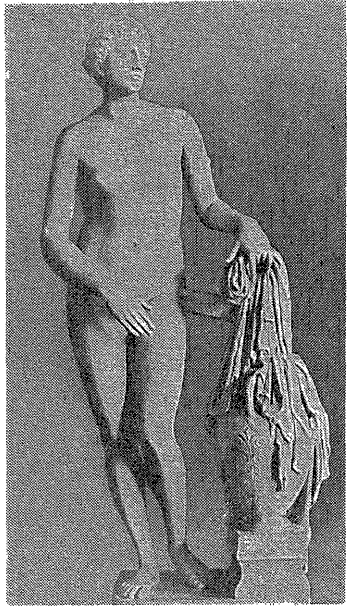


図 6

は、そこに美の力と同時に天の力を満たすことができた。すなわち、プラクシテレスのアフロディテ像は、官能的な魅惑の力と絶対的な美を、プラトンのいう「世界を貫く認識論的存在」の反映として、結びつけたのである。それゆえ、クニヒシスのアフロディテは、以後ギリシア美術が無数に生み出す裸体のアフロディテ像の規範となりえたのであった。

註

文献引用に際しては次の略号を用いた。

AM : Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts.

Athenische Abteilung.

BCH : Bulletin de Correspondance Hellénique

IG : Inscriptiones Graecae.

JdI : Jahrbuch des Deutschen Archäologischen Instituts

LIMC : Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae II (1984)

ML : Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen

Mythologie

ÖJh : Jahreshefte des Österreichischen Archäologischen In-

stituts

RE : Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft

(1) テキストについては、Platon, Werke in acht Bänden. Griechisch und Deutsch. Bearbeitet von D. Kurz (1974) III を使用した。

(2) このような二種のアフロディテ像の影響は、オウィディウスの文筆家の上に見られる。主なものを ML, MLIII, 1 (1902) の Pandemos の項 (Eisele) を参照、RE, XVIII, 1 (1949) の Pandemos の項から引用する。

Theokritos, Fr. 13=Anthologia Palatina 6, 340

Nikarchos, Anthologia Palatina 5, 54

Pausanias, IX 16, 2

Plutarchos, Moralia 674 B

Plotinos, Enneaden III 5, 8

Heliodoros, Aithiopia 1, 19

Cicero, De natura deorum III 59

- Clemens Alexandrinus, Stromateis III 3, 27
 Johannes Lydos, De mensibus IV 116 W
 Photios, Bibliotheca 372 b
 なじみある。ルネサンスに於ける哲学および美術への影響を
 じつじつ E. Panofsky, Studies in Iconology (1939) 参照。
 (3) 参照體として W. Marg, Hesiod. Sämtliche Gedichte²
 (1984) を使用した。
 (4) シモンが伝えるその誕生物語をより簡潔に、そして美
 しく昇華させたものにはホメロス風モノローグテ讚歌第六歌が
 ある。
 (5) Marg, *ibid.* (註³) p. 121-123 参照。
 (6) Herodotos, I 105 及び Pausanias, I 15, 7 及び同様に
 上記の如きもの。
 (7) W. F. Otto, Die Götter Griechenlands (6. Aufl. 1970)
 p. 92; H. Herder, Die Ursprünge des Aphroditenkultes
 (1960) p. 61-76; E. Simon, Die Götter der Griechen²
 (1980) p. 229 ff.
 (8) (註⁷) 参照。クロトナスは、ギリシヤ最古のモノローグ
 テネシモノローグ・ウラニオンと称せらる。 (註⁶) 参照。
 (9) デイダモス Ilias, III 374; V 131, 312. Odysseea VIII 308.
 (10) この讚歌を『ヘッメロス』の作者として人物を起敬する説がある
 (K. Reinhardt, Ilias p. 507~521)
 (11) Ilias V 370~371 及び『オウロウロトス』のモノローグ
 テネシモノネの娘と称せらる。 Euripides, Helene 1098
 (註) Chr. Karusos, JdI LII 1937 p. 178 参照。

- (31) Euripides, Phaethon, Frg. 781 (1101) 15
 (41) *Tōde soi, ὃ μετὰ δὴ Πανδῆμα Ἀφροδίτη* (IG II
 1531 b)
 (45) ἄρα αὖ οἱ ἀστυνόμοι οἱ αἰεὶ καρτεράνορες ἐπιμέλειαν
 ποιοῦνται τοῦ ἱεροῦ τῆς Ἀφροδίτης Πανδῆμου κατὰ τὰ
 πάτρια... (δεδοῦσθαι τῆ βουλῆ) τοῖς ἀστυνόμοις τοῖς
 αἰεὶ καρτεράς, ἄρα ἢ ἡ κοινῆ τῆ Ἀφροδίτη τῆ Πανδῆμου
 παρασκευάσει εἰς καθάρου τοῦ ἱεροῦ περαιτέρου καὶ
 περαιεῖσαι τοῖς βωμοῖς καὶ πύλαις τὰς ὁδοὺς καὶ
 λαῶσιν τὰ εἶδη, παρασκευάσαι δὲ καὶ πορρωτέρω ὁλοῦν...
 (IG II² 659)
 (49) Πανδῆμος Ἀφροδίτη... Ἀπολλόδοπος ἐν τῷ περὶ θεῶν
 πᾶνδῆμων φησὶ Ἀθήναι κληθῆναι τῆν ἀφροδυθείαν
 περὶ τῆν ἀρχαίαν ἀγορὰν διὰ τὸ ἐνσταθεὶ πύραι τοῦ
 ὄγκου συνάσθαι τὸ παλαιὸν ἐν ταῖς ἐκκλησίαις, αἷς
 ἐκείλων ἀγορὰς (RE XVIII 1 p. 508 4 575E)
 (47) J. Travlos, Pictorial Dictionary of Ancient Athens
 (1980) p. 1 f.
 (81) Pausanias I 22, 1~3
 (91) U. Knigge, AM 97, 1983 p. 169 Anm. 129 参照。
 (93) E. Simon, Die Götter der Griechen (1980²) p. 250 Fig.
 252 及び同註釋 Festivals of Attica (1983) Plate 15, 1
 (95) L. Beschi, Contributi di Topografia Atheniese. An-
 nuario della Scuola archeologica di Aene e delle Mis-
 sioni italiane in Oriente 45/46 (1967/68) p. 520~26 fig. 9

- (22) 'Apopoθnyn dē tēn Haidōnion, ēmesi te Athnvaious θnoeūs ēs miau hēraen anō tōu dēgmuu pōliu, aōtēn te aōBēdōu kai Theōō karētōnoe. tā meū dē palaia arāhymata oūk hē ēnē imōō' (Pausanias I 22, 3)
- (23) Thukydides II 15 4-5 Plutarchos, Theseus 24 参照。
- (24) 註 (15) 参照。
- (25) マイヌキトロンの悲劇『怒々の女神たち』の中で、ヤノーは重要な「護世」の女神として扱われる(Aischylos, Eumenides 885 ff.; 970 ff.)
- (26) Pausanias K 16, 3
- (27) Pausanias VIII 32, 5
- (28) Pausanias VI 25, 1
- (29) W. Dittenberger, Syllolge inscriptionum Graecarum p. 370, 57
- (30) BCH VII 1888 p. 32 No. 12
- (31) Paton-Hicks, Inscriptions of Cos No. 401
- (32) この碑で、ヤノーのトロイアテが信仰されていた (Athenaios, Deipnosophistae XV 675 F 参照) が、その聖域からは、ハンデモスへの献詞を刻んだ陶器も出土している (Jdl W 1889 p. 211)°
- (33) ハウサニマスは、テーバイではウラニア、ハンデモス、アポストロフィアと称される三種のアフロディテが信仰されており、ウラニアは純粹に精神的な愛、ハンデモスは肉体的な愛を司り、アポストロフィアは愛の恐ろしさを避ける女神であり、たとえ結婚していても (Pausanias K 16, 3)°。しかし、この

ようなプラトン以後の倫理思想に強く影響された考えが、この頃からテーバイに於けるアフロディテ信仰と結びついていたかは判りづらい(註2参照)。メガロポリスに於ける三種のアフロディテの信仰(註27参照)は、テーバイの信仰を受け継いだものと想われる。

- (34) 註 (22) 参照。
- (35) 註 (15) 参照。
- (36) Archäologischer Anzeiger 1893 p. 140 ff.
- (37) ibid. p. 147 参照。
- (38) Pausanias K 16, 3 註 (26) 参照。
- (39) Pausanias VIII 32, 2 註 (27) 参照。
- (40) メガロポリス (Megalopolis) は、紀元前 三三六年頃、テーバイの援助のちで建國された。
- (41) Pausanias V 25, 1 註 (28) 参照。
- (42) M. Bernhart, Aphrodite auf griechischen Münzen (1934) No. 330, Taf. 9; LIMC, Aphrodite No. 976
- (43) プラタノロンがその信仰の中心を説明している (Plutarchos, Theseus 18)° Apopōtēn 'Etrpōpēia が、アテナイに独自の聖域をもっていたことは、ローマ帝政時代のデヤオニッテス劇場で、この女神に仕える巫女の指定席が在ったことからわかる (RE V p. 222 f.)°。従来、ハンデモスとキビトラギアをその信仰の創造者がいずれもテセウスであることからも同一視する説が強く、近年に於いても E. Simon (Die Götter der Griechen 1980° p. 252) St. Miller, Two Groups of Thessalian Gold, University of California Publica-

- (67) 唯一の例外と思えるものに、エウリピデスの失われた悲劇『メラニッペ』からの断片がある。そこには、「神の意図は星が昇るときに告げられる」といった文句が見られる。
Euripides, *Melanippe*, Frg. 482
- (68) この句はすでにホメロスに見られる。Ilias XXII 29
- (69) 註(53) 参照。
- (70) 註(63) および Plurarchos, *Nikias* 23 参照。
- (71) ヒカンドロスはその著書 *Kolophonika* の第三巻の中で「このような逸話を伝えたところから (Athenaios, *Deipnosophistae* XIII 569 d)。」
- (72) このようにして知識階級に入り込んできた民間信仰の女神は、やがてより高級な哲学的思索の中にも紛れ込むようになる。アリストテレスは、惑星(金星)を女神アフロディテと結びつけ、*ἀστὴρ τῆς Ἀφροδίτης* という言葉を後世にのこした最初の人物である (Aristoteles, *Metaphysica* XII 8, 32)。
なお、それよりやや早くプラトンは、惑星のひとつ(水星)を神ヘルメスと結びつけ、*ἀστὴρ τοῦ Ἑρμοῦ* と称している (Platon, *Timaios* 38 D)。
- (73) ソフィストたちによる神話の合理的な解釈とそれに対するプラトン(あるいはソクратレス)の反駁の例は、たとえばプラトンの『ファイドロス』229 B-D に見ることが出来る。
- (74) 従って、アテナイのアフロディテ・パンデモスの礼拝像もまた小美術の場合と同様、牝山羊に乗った女神を表していたとするフルトヴェングレルおよびクニッケの説は受け入れられなければならない (Furtwängler, *ibid.* (註47) p. 598 を参照) Knigge,

- ibid.* (註54) p. 160, 165 参照。また、エリカ・シモンは、フッティカ発行の貨幣の上に古いアフロディテ・パンデモスの礼拝像を認めることができると主張している (E. Simon, *Aphrodite Pandemos auf attischen Münzen, Schweizerische Numismatische Rundschau* 49, 1970, p. 5 ff.)。
- (75) 拙論「原作の魅力——クニッケスのアフロディテについて」——『フガルト』澤柳大五郎先生古稀記念美術史論文集 (1982) p. 39~52 図版 386~387 参照。

図版典拠

- 1 著者作図
- 2 *Archäologischer Anzeiger* 1893 p. 147 Fig. 30
- 3 *LIMC Aphrodite* No. 976
- 4 *ML III* 1 (1902) p. 1514
- 5 *AM* 97, 1982 Taf. 31
- 6 *Propylaen-Kunstgeschichte I* (1967) Taf. 107

(付記) 筆者のギリシア後期のアフロディテ像に関する研究に対しては、財団法人・鹿島美術財団より研究助成が与えられています。ここに、鹿島美術財団に感謝の意を表します。また、研究資料の蒐集に御協力下さいましたミュンヘン大学考古学研究所、フライブルク大学考古学研究所、ドイツ考古学研究所(ローマ)、女子美術大学図書館、並びに他の諸研究機関に感謝します。

(なかやま のりお)